

「与論島の『ヤーナー（家名）』 継承要因と今後への展望」への コメント

町 泰樹（鹿児島高専・一般教育科）

1

自己紹介

- 町 泰樹（まち たいき）
 - 与論島出身。高校卒業まで島で過ごす。
 - ヤーナーは「ウシ」：父方祖父から継承

- 研究テーマ
 - 与論島の近代における葬制の変容に関する研究（2007~2015）
 - 奄美群島における神社と民俗信仰の関係に関する研究（2014~至現在）

- 今回は、現地の人の目線でコメントができればと。

2

興味深かった点

- 研究テーマ
 - 島民にとってはヤーナーの存在が当たり前のこと。故に、そこにどんな価値があるのかは見過ごされがち。
 - そこにスポットを当ててもらえると、純粋に嬉しい気持ちになる。
- 研究方法
 - 子供達にアンケートをとって、そこから継承の問題を考える点に独創性がある。
 - 従来民俗学的な研究では、通過儀礼研究の一部（産後の名付け祝い）として扱われることが多い。
- 結果
 - 「ヤーナーで呼ばれること」と「ヤーナーを誰から頂いたか知っていること」が継承につながる。
 - 多くの島民は継承に前向きだと思うので、現地に還元できる知見であると思う。

3

補足した方が良さそうな情報

- 過去にはヤーナーに身分差があった。（明治末期ごろまでか？）
 - 男子：マサブル（マサ）、トラゾウ（トラ）、ハニゾウ（ハニ）
 - 女子：マチガネ（マチ）、マナベ（ナベ）、ミトガネ（ウト）
 - 増尾国恵『与論島郷土史』与論町教育委員会（S.38）

4

コメント

- ヤーナ社会的功能と継承の関係について（わが家の事例）
 - 妻（マグ：夫の母から）、長女（マグ：父方祖母から）、次女（カミ：父方祖父の母から）、三女（ウシ：父方祖母の母親から）
 - 妻は、山口県出身。結婚の際に、与論ではヤーナーをつけるという話になり、私の母から「私と同じヤーナーにしよう」と提案され、マグに。
 - 「人と人（故人含む）をつなぐ」、「人と集団（親族）をつなぐ」という機能があり、家族や親族への加入（身内になる）を示す指標になっている。
 - 島出身者だけでなく、島外出身者にも適応されるという柔軟性を持っている。コストもかからない。
 - こうしたある種の柔軟性と「お手軽感」も継承要因の一つといえないか？

5

コメント

- 歴史軸は、より詳細に検討しても良いのでは？
 - 与論島は、復帰以降は観光が一大産業となる。
 - 昭和30年代後半から50年代半ばまでの20年間で、奄美全域で農家戸数が50%以上減少し、過疎化が著しく進んだが、与論島では20%程度に止まり、過疎化をくい止めた。
 - （戸谷修「与論農村の構造と変化—朝戸部落を中心に—」松原治郎他編『奄美農村の構造と変動』御茶の水書房、1981年）
 - 奄美という地域は、自らのアイデンティティを語る時に、「沖縄とも違う」、「本土（日本）とも違う」という「二重の疎外」の中でしか語れない。
 - 喜山荘「奄美自立論—四百年の失語を超えて—」南方新社、2009年。
 - 観光化という経験によって、自文化に新たな価値付けができたこと、年中行事や人生儀礼を行うための人的資源の流出が抑えられたことは、奄美群島他地域との違いにならないか？

6

■ 奄美群島の自文化認識

琉球文化と大和文化の両方の影響を受けてきた奄美の文化は、方言や世界観、宗教信仰、シマウタや八月踊りなどの民俗芸能等々、日本の中の「異文化」として研究されるくらい非常に独特だといわれてきました。1970年代頃までは、その違い（差異）や「島」自体が、むしろ差別を生み出す要因であり、否定的な価値でしかありませんでした。ゆえに、1970年前後まで、学校教育では方言を使うことが厳しく戒められました。都会で標準語がうまく話せないというだけで差別されたり社会に適応できなかったりしたからです。本土に出てきた奄美出身者のなかには、奄美出身であることを堂々とあかせなかったという話もよく耳にします。

ところが、1990年代以降、この奄美の文化のその差異が、それ以前とは逆に、価値あるものとして次第に評価されるようになりました。1990年代の沖縄のミュージシャンの活躍や島唄ブーム、そして2002年の、奄美出身の唄者元ちとせの歌の全国的ヒットは、奄美が全国に認知された象徴的な出来事でした。また、それは、奄美の人たちにとっても、自分たちの文化の価値を再認識するきっかけとなった画期的な出来事でした。

－桑原季雄『奄美の文化人類学』（鹿児島大学島嶼研ブックレット No.14）鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、2021年。

*読みやすいよう漢数字はアラビックに置き換えた（引用者注記）。

7

コメント

■ 「与論神道」の中身をより詳細に検討しても良いのではないかな？

- 「ヤーナー」の継承要因として「与論神道」の存在があげられているが、ヤーナー自体が「与論神道」の一部ではないかと思われる。
- 「与論神道」が与論独自の宗教的観念であるとするならば、そこに含まれる靈魂観やそれを支える人生儀礼や葬送儀礼の一部がヤーナーの名付けであるため。
- より良い長寿のなかには死後の想定も含まれることから、下記のような靈魂観に関する説明もあった方が良いのではないかなと思うが、いかがだろうか？
 - 在宅死については、「自宅で死にたい」の背景に、亡くなった場所に魂がいついてしまうという考えもある。
 - ヤーナーをつける産後7日後の名付け祝い（ナーチキヨイ）では、「塩一升の位、粟一升の位、百二十の位をつけてください」（マシユイッシュューヌクレ、オーイッシュューヌクレ、ピヤクニジューヌクレアラチタバーリ）と祈願する。この「クレ（位）」は、「絶対なるものがその生命に与えた靈氣」とされる（栄喜久元『奄美大島 与論島の民俗』自刊、1964年）。

8

質問

- 研究方法は、なぜ「子ども」を対象としたのか？
 - 継承の問題を考えるならば、親世代の方がより当事者性が強くなるように思われるが。
- 与論島には小学校が3校あるが、1校にした理由はあるか？
- 呼びやすい（呼ばれやすい）ヤーナーがあるような気がするが、調査結果からはどうか？
- 奄美・沖縄でヤーナーをつける風習が残っているところはあるか？